カウンセリングにおける PAC（個人別態度構造）分析の効果¹

東京外国語大学² 井上孝代

Effects of PAC (Personal Attitude Construct) Analysis in counseling

Takayo Inoue (Japanese Language Center for International Students, Tokyo University of Foreign Studies, Sumiyoshi-cho, Fuchu 183-0034)

The aim of the present study is to prove that the use of PAC Analysis will enhance and facilitate counseling effects. Eleven functions were hypothetically presented: (1a) Intake Facilitation Function, (1b) Self-Disclosure Facilitation Function, (1c) Trust Formation Function, (1d) Dialogue Development Function, (2a) Mutual Understanding Function, (2b) Clarification Function, (2c) Self-Understanding Facilitation Function, (2d) Counselor's Awareness Function, (3a) Descriptive Documentation Function, (3b) Practical Explanation Function, and (3c) Evaluation-Assessment Function. By examining two case studies of international students' counseling process, these functions were analyzed. Results showed that all the functions were confirmed. Introducing PAC Analysis into counseling is proved to be effective in the direct intermental function field in counseling process (1a to 1d), the intramental function field between a client and a counselor (2a to 2d), and the indirect intermental function field including description, explanation, and assessment (3a to 3c). It is discussed that PAC Analysis is expected to take an important role in counseling in general.

Key words: PAC Analysis, counseling, international students, assessment, case study.

カウンセリングに PAC（パック）分析を導入する効果について、二つの留学生カウンセリングの事例をと明かにすることが本研究のテーマである。PAC 分析の PAC とは、Personal Attitude Construct（個人別態度構造）の略称であり、もともとは個人別に態度構造を測定するために内藤（1993, 1994）によって創造・開発された研究方法である。この分析法は、①当該テーマに関する自由連想（アクセス）、②連想された項目間の被験者による類似度評定、③類似度距離行列によるクラスター分析、④被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、⑤実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する手法である（内藤, 1997）。

その手続き（内藤, 1994, 1997）は、①刺激語の決定、②カード記入による連想反応語の生成と連想順位・重要順位の同定、③各反応語の対の類似度評定による類似度距離行列の作成、④クラスター分析によりデンドログラム（樹形図）を作成、⑤樹形図の各項目と全体の印象・下位構造について被験者が解釈、⑥実

験者によるクラスターの命名と総合的解釈、の各ステップをふむ。PAC 分析の特徴は、下位技法として、“自由連想”“多変量解析”“現象学的データ解釈技法”の三つを組み合わせたものといえることができる（内藤, 1997）。

PAC 分析は、開発された当初からカウンセリングや心理臨床への応用の可能性が指摘されていた（内藤, 1993）。井上・伊藤（1997）は、カウンセラーとクライアントとのカウンセリング過程に PAC 分析を応用した試みの初めての報告であり、PAC 分析の効果として、10 点の特徴を指摘している。また、井上（1997）の事例研究は、留学生を対象とした学生相談活動の中で PAC 分析を用いて効果があることを述べている。

本研究では、井上・伊藤（1997）をふまえて、PAC 分析のカウンセリング導入への効果を大きく三つの機能分野に整理して、論を進めていく。第一の機能分野は、1 対 1 のカウンセリングの場におけるカウンセラーとクライアントの関係に着目した分野である。カウンセリング場面における二者関係は特徴的な関係であって、この関係の成否がカウンセリングの成功・不成功に重要な意味をもつ。本研究では、そのような二者関係の形成に PAC 分析の導入がどのような役割を果たすかを検討する。この第一の分野をヴィゴツキーの用語にならい直接的精神間機能分野とよぶこ

¹ 本研究は平成 8, 9 年度文部省科学研究費（基盤研究 C, 課題研究番号 08610111, 研究代表者：井上孝代）の補助を受けた。

² 現所属：明治学院大学（Department of Psychology, Meiji Gakuin University, Shirogane-dai, Minato-ku, Tokyo 108-8636）

とにする。“直接的”としたのは、この機能がカウンセリング場面という1対1のマイクロ・システム(Bronfenbrenner, 1979 磯貝・福永訳, 1996)を基本に展開されるためである。第二にクライエント自身の精神世界とその変化についてPAC分析の及ぼす影響を精神間機能分野とよび検討する。カウンセリングにおいては、最も本質的な無意識を含めた心の構造や問題の明確化や現象学的理解が問題となろう。第三の機能分野は1対1のカウンセリング場面を超えて作用するPAC分析の効果に関するものであり、第三者への働きかけにおけるPAC分析の効果を検討する。これはマイクロ・システムの外にある人間を対象とするので、間接的精神間機能分野とよぶことにする。

第一の機能分野では、カウンセリング場面での“いま、ここで”の信頼関係形成と対話の道具としてのPAC分析の効果を検討する。まず、“カウンセリング導入への心理的抵抗を低減し、動機を高める”ことにより、関係が成立することを助ける道具としてPAC分析が有用であろう。これを[1a. 導入促進機能]とよぶことにする。次に、クライエントが心理的に抵抗ある事柄も含めて、自己開示をおこなっていく上で、PAC分析は語連想という心理的に抵抗がない方法から出発し、樹形図による自己対面による対話をとおして、自己開示の効果があると予測し、これを[1b. 自己開示促進機能]と名づける。PAC分析はカウンセラーとクライエントの二者の共同活動によって信頼感を深め関係の安定に寄与すると考えられる。これを[1c. 信頼感形成機能]とよぶ。さらに、樹形図解釈の対話などをとおして、共通話題によるコミュニケーションが(PAC分析終了後も含めて)発展する効果が考えられるので、これを[1d. 対話発展機能]とよぶことにする。

第二の機能分野として、クライエントの内面で、問題への認識と自己理解を深める道具としてのPAC分析の役割が考えられる(精神内機能分野)。まず、[1d. 対話発展機能]とも関連するが、共有知識の理解が共同活動をとおして深まる効果が考えられるので、これを[2a. 共有知識的理解機能]とよぶことにする。適切な刺激語によるPAC分析により問題の“明確化”(Ivey & Gluckstern, 1974 福原・梶山・國分・楢木訳, 1985)が生ずる効果を起こすことを[2b. 明確化機能]とよぶ。また、PAC分析の全体をとおしてクライエントの自己理解と他者理解が促進することが期待される。これを[2c. 自己理解促進機能]とよぶ。さらに、カウンセラーにとっても認識の深まりや気づきのきっかけになる可能性もあるので、これを[2d. カウンセラー気づき機能]とよぶ。

第三の機能分野として、カウンセリングの1対1の場面を超えて、クライエントのもっている内面世界を、第三者にも理解可能な形で提示する、客観的なデ

ータ・資料・査定・評価の道具としてのPAC分析の機能がある(間接的精神間機能分野)。いわゆる心理テストの一種としてのPAC分析の機能である。まず、カウンセリング過程内で生じている、個の主観的世界を客観的に記述し記録することができる効果が期待される。これを[3a. 記述記録機能]とよぶ。次に、関係者へのコンサルテーション(山本, 1986)のための客観的資料として、クライエントの状況を説明するための道具としての効果が考えられる。これを[3b. 実務説明機能]とよぶ。カウンセリングの効果を測定・評価するために、クライエントの内面世界がカウンセリング開始時からカウンセリング終結時の2時点でどのように変化したかをPAC分析によって、いわば事前・事後テスト的に利用し、カウンセリングの効果を評価することが可能である。これを[3c. 評価査定機能]とよぶことにする。

これらの諸機能が存在するかどうかに加え、新しい技法としての有効性を明確にするためには、投影法(村瀬, 1965)や書記的方法(福島, 1995a, 1995b)などの他の技法と比較検討することも必要である。

目 的

本研究の目的は、カウンセリングにおけるPAC分析の効果について、11の機能をカウンセリングの事例をとおして検討することにより、それらの存在を確認し、その有効性を検討することにある。

方 法

実際のカウンセリング過程でPAC分析を導入した事例によって上記の機能の存在を確認し、PAC分析の効用と限界を明らかにするため、問題とアプローチの異なる留学生を対象とした学生相談の2事例のカウンセリング過程を分析対象とする。二つ目の事例で2回のPAC分析をおこなったのは特に[3c. 評価査定機能]を検討するためである。

研究の対象者 留学生2名の2事例である。男子学生の事例Qでは、進路相談をきっかけにした男子学生のカウンセリングの導入に“留学生活”を刺激語にしてPAC分析をおこなった。事例Nの女子学生には、緊急相談の直後と問題が解決した時点での“留学生活”についてPAC分析をおこなった。各事例ごとにPAC分析の結果の検討がおこなわれた。

〈カウンセラー〉 これら2事例のカウンセラーは、国費学部留学生の予備教育機関(1年間・全寮制)の“生活指導部”専任教員として、毎年約60人の留学生向けに、午後から夜間にかけて寮棟と教育棟の中間に常設されている相談室でカウンセリングを担当していた。

PAC分析の手続き まず、口頭で“あなたにとって○○○(刺激語)はどのような意味をもちますか？

そのイメージを浮かんだ順にカードに記入して下さい”と教示した。出た反応語を重要な順番に並べかえて、順位をつけて項目番号とし、イメージの各項目に、直感的に肯定的(+), 否定的(-), 中立(0)の判定をしてもらった。次にランダムにすべての対を選びながら、7段階の評定尺度によって、“非常に近い”から“非常に遠い”までの7段階を評定してもらい、項目間の類似度距離行列を作成した。このデータをSPSS for Win 6.1.3に入力し、クラスター分析をおこない、その結果をFigure 1,2,3にみられるようなデンドログラム(樹形図)として出力した。

結果

1. 事例Q

主訴 進路について相談したい。

Qは東南アジア出身の男子学生(19歳)で、出身国では経済面・教育面で恵まれた環境に育った。専攻分野に関する情報をもらいに相談室を訪れたのを契機に、やがて自分の適性など進路に関する相談のため来談するようになった。

面接経過の概要

〈第1期：進路相談、#1—#5〉 国立大学文科系の専攻学部に関する情報をもらいに相談室を訪れ(#1), 2回目には“できれば専攻を変更したい”と語った(#2)。本人の専攻変更の趣旨を確かめ、関係者との調整をおこなうとともに、Qの希望で適性検査・心理検査を実施し、結果をもとに進路について話し合った(#3—#5)。

〈第2期：PAC分析によるカウンセリング導入、#6—#7〉 Qは、礼儀正しく勉学態度・日常生活態度

も優秀な学生であった。Qとの進路相談の過程は円滑に進んだ。ただし、カウンセラーとしては、Qの応答に何か表面的・画一的な印象を感じ、Qの本当の問題がつかめていないのではないかという気がしていた。Qはこのころには、明確な希望専攻を示しており、個人の態度・イメージの構造を分析する新しい手法としてのPAC分析に強い興味を示したので実施した(#6)。Figure 1のPAC分析の結果のデンドログラム(樹形図)をもとに話し合ったところ、Qは自分の予想もしていなかった心理的・内面的結果が示されていることに驚いた。そして、Qには中学生のころから対人関係に強い緊張感があることを述べはじめ、“実は、あまり親しくない人とのコミュニケーションがうまくできなくてずっと悩んでいた”と、以後、続けてカウンセリングを受けたいと希望した(#7)。

〈第3期：カウンセリングの深まり、#8—#12〉 Qのカウンセリングにあたっては、QのPAC分析のイメージ反応語の一つ一つについて話をすすめることとした(#8)。それは根気のいる作業であったが、イメージにまつわるQの気持を確認していくことにより、Qは決して十分ではない日本語による表現を補足できるという満足感とカウンセラーに対する信頼感を増していったようである(#9)。とくに、自分で命名した“心の底”というクラスターについて語るうちに、それまではだれにも語ったことがなかった両親との心理的軋轢を話し始めた(#10)。“技術職の父は、長男である自分に同じ理科系の生き方だけを強要し、小さいときから文科系科目に関心の強い自分の進路希望に耳を傾けようとはしなかった。母は感情の起伏が激しく信頼できず、祖母もただ盲目的な愛情を示しただけだった。自分は青年になるにしたがい心理的に孤立し、

Figure 1. Qの“留学生活”イメージ。

ずっとつらかった”と感情を込めて語った(#11)。日本への留学は、逆らうことが許されない父親や家族からの逃避であり、日本での進路決定が後手になったのも、そのためであることが本人にも理解できるようになった。Qは自分が本当に進みたい進路を家族に電話や手紙で説明し、父親からも承諾を得るようにすることを約束した(#12)。

〈第4期：カウンセリングの終結とその後、#13—#14〉 Qはカウンセリングをとおして自分で大学の専攻分野を決定でき、しかも自国の家族の理解を得ることができたことを安心したように話したのを機会にカウンセリングを一応終結した(#13)。その後、大学に進学したあと相談室にやってきた折、“自分の希望どおりの専攻ができ大学生活が楽しい”と述べ、“自分の国の人にも話したことがない心の悩みを日本人の先生に話せたことが不思議だ”としみじみ語った(#14)。

事例QのPAC分析(“留学生活”イメージ)の結果と考察(Figure 1) Qの反応語は13項目であった。反応語の約半数は肯定的イメージ、約半数は否定的イメージだった。また、“自国を訪問したい”というイメージが中立的イメージであることはQの現在の心境をよく表していると考えられる(本人は“いますぐ国に帰りたいけど帰たくない”と答えている)。クラスターの総合的解釈としては、Qとの話合いで大きく二つのクラスターに分けられた。クラスター1は、“難しい外国語”から“一人暮らし”までの“未来”のイメージで、クラスター2は“ときどきつまらない”から“自国を訪問したい”までの“心の底”というイメージである。

“未来”のイメージは、“日本語の難しさ”と“留学の長所”からなる“向上”という下位クラスターと“自分の成長”という下位クラスターから構成されている。これは日本語をマスターすることは困難だが、一方ではそれが留学することのメリットであり、将来の自分の成長のためには不可欠であるというQのいわばたてまえの留学目的の認識を明確に示しているといえよう。“心の底”のイメージは“仕方がないこと”と“懐かしい気持ち”の下位クラスターからなる。仕方がないこととは、本人によれば本国にいる家族との接触のなさに関するものであり、懐かしい気持ちの方は、友人などに対する感情であるということがPAC分析の解釈の対話のなかで明らかになってきた。両者が別のクラスターになっていることから、そのことをカウンセラーが尋ねたところ、Qは、“それまで他人に一度も話したことがないけれども”と前置きして、父親と母親に対する反発を語り始めた。これを契機にして、一挙に自己開示がおこなわれ、カウンセリングが展開していった。

この例に示されているように、PAC分析の樹形図

の内容の解釈は、被験者との対話をもとに再構成したものであり、間主観的な客観性が、ある程度保障されている。

2. 事例N³

主訴 寮を出たい。全然勉強ができない。このまま、寮にいとストレスのため眠れないし食事もとれない。

Nはオセアニア出身(英語圏)の19歳の白人の女子学生である。日本語運用能力は高い。教育的な家庭環境で育った。出身国の支配的な文化は西欧的な個人主義的文化であり、独立精神が奨励される風土である。

面接経過の概要

〈第1期：緊急相談期、#1—#18〉 自主来室し、カウンセラーを見るなり、無言のまま涙をあふれさせた。“もう、我慢できない。寮を出たい”と泣いて訴えた(#1)。カウンセラーは本人の様子や発言から、緊急相談の対応として機関の教育・事務関係者への連絡・会議での善後策の検討など関係者との調整面接を実施し、Nには機構・組織・契約などの社会的ルールに関して出身国と日本との対比を含め話合いを進めていった(#2—#9)。

Nの心理的な問題をより正確に把握するためと、それを関係者に説明できるものとしてNの留学生活のイメージの構造を測るPAC分析をおこない、それをもとに話し合うことが有効であると考えられた(#10)。第1回目のPAC分析をおこなった(#11)。この結果の解釈をカウンセラーと共同しておこなうことで、ずいぶん落ち着きを取り戻し、文化的差異への気づきをみせはじめ、同時に子どものころから抱いていた身体的コンプレックスの点についても自分から話せた(#12—#18)。

〈第2期：発達援助期、#19—#36〉 自分のアパートに住み始めて1週間がすぎたころに、Nは相談室に嗜れやかな表情でやってきた(#19)。“本当にすばらしい。学校と住むところが違って、私の住む所があるのがすばらしい。赤ちゃんも子どももいて、人々の普通の生活がある”。Nのこれらの実感をふまえて、今後のNの行動に関して話し合った(#20—#22)。2か月がすぎたころには、具体的な生活の仕方についての話合いが進んだ(#23—#30)。冬休みに来日した家族を見送ったときの体験を語った(#31)。“成田で悲しくて涙がでた。しかし、同時に不思議な感情を味わった。‘ほっとしたという感じである’。つまり、自分のスペースの確保が自分の生活の実感として感じられた”。このエピソードをもとに、親からの独立、アイ

³ 事例Nの面接経過の詳細は、井上(1997)に紹介されている。

デンティティの確立などについて話し合った（#32）。このころ、カウンセラーが日本文化論の本を貸し、一緒に読後感などを話し合った（#33—#38）。

〈第3期：カウンセリング終結期，#39—#46〉3月になって前年の9月以来の本人の退寮をめぐる体験の意味について振り返ることをおこなった（#39—#40）。本人の留學生活のイメージが第2期からどう変化したかをみるためPAC分析第2回目をおこなった（#41）。修了式を迎えるころには、進んで卒業アルバムの作成に参加し、夜遅くまで多くの寮に住む友人と共同作業を続けた。相談室にも頻繁に話しに立ち寄り、見たり聞いたりして感じたことを、快活に語った（#42—#46）。

事例NのPAC分析の（“留學生活”のイメージ）の結果

（1）第1回目のNのPAC分析（Figure 2） クラスター1は“友達を作って相談する”から“コンビニ”までで、まとまったイメージとしては“生活様式（スタイル）”と解釈できる。これは寮の生活（“友達を作って相談する”から“もう狭さに慣れたが広い場所に行っても精神的な狭さを感じられる”まで）と一人暮らし（“一人で住むことに慣れる”から“コンビニ”まで）という二つの下位のクラスターからなっており、寮の生活を示す連想語に否定的イメージ（－）が多いのが注目される。クラスター2は“問題を解決する方法を見つける”から“勉強”までの“努力”のイメージである。クラスター3は“自分に合う、合わない文化の違いがわかってくる”から“他の未知の人でも手伝ってあげる”までの“エイリアンとしての私”のイメージである。これは、異文化（“自分に合う、合わない文化の違いがわかってくる”から“新しい町、あるいは交通などの制度を探検する”まで）と隔離（“生活のなかの制限”から“他の未知の人でも手伝ってあげる”まで）という二つの下位のクラスターからなっている。

クラスター2とクラスター3は最終的には“異文化適応の努力”という大きなイメージにまとまっていくといえる。すなわち、第1回目のPAC分析の結果から、この時期のNの留學生活は、生活のスタイル（寮の共同生活か、一人暮らしか）をしっかりと模索しつつ文化的適応を目指しながらも、自己と日本社会との関係がうまくいっていない状態におかれ、日本人との違和感を感じ、異邦人意識が強まっている。

（2）第2回目のNのPAC分析（Figure 3） 第1回目のPAC分析の結果と比較し、本人の変化をみるため、第2回目のPAC分析をおこなった（Figure 3）。2回目のPAC分析の結果は大きく二つのクラスターにまとまる。クラスター1は“人間関係”から“他の人の考え方、やり方を尊敬すること”までの“文化を超えた人間関係”のイメージと解釈できる。

これは他の人との関係（“人間関係”から“コミュニケーションの大切さ”まで）と異文化の取り入れ（“生活（life）について習うこと”から“他の人の考え方、やり方を尊敬すること”まで）の二つの下位のクラスターからなっている。クラスター2は“経験”から“勉強（科目）”までの“自分の成長”のイメージと解釈される。これは人間の自由（権利）（“経験”から“楽しい方法を見つけること”まで）と勉強（1項目のみ）の二つの下位のクラスターからなっている。

2回目の連想語は1回目と異なり否定的イメージがなく、すべて中立か肯定的イメージであることも注目される。文化を超えた人間関係と自己の成長の二つのクラスターについて、留學生活・体験が両者を結びつけるものとNは説明した。すなわち、異文化体験と自己形成とが本人のイメージの中で有機的に統合されている。

（3）事例Nの2回のPAC分析による考察 事例Nについては、問題が解決する前と後の留學生活のイメージの変化が、PAC分析の結果であるFigure 2とFigure 3の比較により明らかになる。すなわち、Figure 2では異文化のなかで、隔離されている感覚をもっている異邦人としての自分のイメージがあったが、Figure 3での文化受容に関するイメージでは、対人関係のなかで日本文化を中心として異文化を取り入れ自文化によるアイデンティティと統合していこうとする姿勢が表れている。

また、第1回目の樹形図は、関係者へ事例Nの心理状態を説明するときに最も効果的な資料となり、問題を学校コミュニティに知らせるのに役立ち、その後のコンサルテーション活動（山本，1986）をやりやすくした。また、第2回目のPAC分析結果は、関係者にみせて説明することにより、事例Nの心理的満足感と安定が確認され、学校全体で取り組んだ結果が成功したという評価の貴重な材料として役立った。

考 察

各機能の検討

二つのカウンセリング事例によって、さきに挙げた11の機能について検証する。各機能ごとにみていく。

〔1a. 導入促進機能〕は、カウンセリングに対する導入と心理的抵抗感の低減にPAC分析が役立つかという効果に関するものである。2事例ともPAC分析によりその後のカウンセリング過程が深くかつ円滑に進んだ。とりわけ事例Qの場合、はじめは進路相談が目的だったが、PAC分析を施行することにより、本人からその後のカウンセリングを希望してきたものである。また、井上・伊藤（1997）の授業欠席の多い事例においても、コンピュータに興味のある学生であつ

たということもあり、PAC分析の被験者としての作業そのものに興味を示し、その後のカウンセリングを順調に進めるきっかけとなり、おおいに効果があったことが報告されている。留学生に限らず、学生相談で来談することへの抵抗感や来談時の不安感をもつ学生は多く、PAC分析によって効果的な展開が期待できるよう。本機能は、2事例の両方、とりわけ事例Qによって明確に確認された。[1b. 自己開示促進機能]は、自分自身をあらわにしカウンセラーが知覚しうるように自分を示す行為がPAC分析によって促進されるかどうかの問題である。事例Qでは、優等生的な本人が、だれにも語ったことのなかった両親との葛藤の問題を、“心の底”というクラスターをめぐって、話し合うことができた。事例Nでも留学生生活における寮生活の意味が明確に示された。よって2事例から本機能の存在が確認された。遠藤(1995)は、カウンセリング場面での自己開示の難しさの研究の必要性を主張している。PAC分析では、コンピュータによって“客観的に”示されたクラスターの命名時に、自己との対峙がせまれ自己開示のきっかけとなると考えられる。[1c. 信頼感形成機能]は、PAC分析による共同活動によりカウンセラーに対する信頼感が深まり、両者の関係が安定的に発展する効果があるかどうかの問題である。事例Qでは、刺激語の一つ一つを丁寧にカウンセラーが聞いて吟味していくことにより、相手の日本語能力の不安を払拭するきっかけとなり、信頼関係を強めた。また、事例Nでは、大学当局側の人間ではないかというカウンセラーに対する不信感が

芽生えている段階でPAC分析をおこなうことにより、対話による信頼感を形成し、結果が周囲の人々の説得(カウンセラーによるコンサルテーション)に有効に使われたことが、彼女を安定させる働きをした。よって2事例から本機能は確認された。[1d. 対話発展機能]は、PAC分析終了後も含めて、共通話題によるコミュニケーションが発展するかどうかの問題である。事例Q、Nのいずれも、PAC分析の結果の解釈をめぐって本人も意欲的に話し、カウンセラーとの対話が発展した。よって2事例では本機能が確認された。

[2a. 共有知識的理解機能]は、共同活動や対話をとおして二者の間に共有される理解が生まれ深まっていく効果である。2事例両方において、樹形図の解釈時の対話をとおして、本機能は検証されたといえる。とりわけ事例Nにおいては、プライバシーをめぐっての文化差がカウンセリング過程で明らかになってきたが、そのきっかけとしてPAC分析の果たした役割は大きいことが示された。[2b. 明確化機能]は、PAC分析によりクライアントの問題の明確化が促進されるかどうかという問題である。事例Qでは、親子間の葛藤の明確化がおこなわれた。事例Nでは、寮生活の問題が留学生生活の困難の中心であることが本人に再確認された。このように2事例いずれもPAC分析は明確化を促進した。よって2事例から本機能は確認されたといえる。Ivey & Gluckstern (1974 福原他訳, 1985)は、“最小限度の励まし”と“言い換え”の技法により言語的カウンセリングのなかで“明確化”を

Figure 2. Nの第1回目の“留学生生活”イメージ。

おこなうことを提唱しているが、本研究で明らかのように、PAC 分析自体がこのような効果をより効率的に発揮するといえそうである。[2c. 自己理解促進機能] は、PAC 分析によりクライアントの自己について洞察が深まり、また他者理解が促進される効果があるかどうかである。事例 Q では、PAC 分析が、自己の“心の底”を毎回のカウンセリングで見つめなおすという自己理解のきっかけを与えた。事例 N では、日本文化と自文化の相対化による自己への洞察が深まった。いずれも意識していなかった自分を発見するきっかけづくりに PAC 分析が貢献したのである。よって 2 事例では本機能は確認された。[2d. カウンセラー気づき機能] は、PAC 分析がカウンセラーの気づきの深まりの契機になるかどうかという問題である。カウンセラーである筆者の内省によれば、2 事例の 3 回の PAC 分析の、とりわけ樹形図のカウンセラーによる解釈と、クライアントとの解釈をめぐる対話をとおして、クライアント理解が一段と深まったという実感が得られた。この機能を確認するためには客観的な指標が必要であろうが、2 事例から本機能は確認される方向にあるといえる。

[3a. 記述道具機能] とは、クライアントの状態を第三者に理解可能な形で伝えうるかどうかという問題である。これは、2 事例とも事例の記述が比較的短いにもかかわらず、PAC 分析の樹形図を図示することにより第三者に理解可能な形で示しようという特徴が 2 事例の本報告でも明瞭であろう。井上・伊藤 (1997) の事例でも、この特徴が際だっている。[3b. 説明道

具機能] は、すでに定義したように、コンサルテーションの客観的資料として PAC 分析の樹形図などの資料が、関係者に説明力をもつかどうかの問題である。事例 Q では、この機能は無関係なので、事例 N を検討する。事例 N では、入寮義務の規則を他の教員にも検討してもらう材料として PAC 分析の樹形図が用いられ効果をあげた。PAC 分析はクライアントの心的世界を関係者に対して視覚的・言語的に提示することができるので、コンサルテーションの資料として有用であることが事例 N から確かめられ、機能は確認された。井上・伊藤 (1997) のように、学生の授業に対する不満とその意味を担当教員に伝えるために PAC 分析を利用したカウンセリング事例もある。山本 (1986) は学生・生徒相談において他の教員や学校関係者に対するコンサルテーションの役割を強調している。このようなコミュニティ心理学的観点からも PAC 分析は注目されてよいだろう。[3c. 評価道具機能] は、PAC 分析がカウンセリング効果を測定する道具として有用かどうかの問題である。事例 N のカウンセリングでは事前・事後テストとして PAC 分析を 2 回利用した。事例 N の 2 回の結果からは、寮を出る前の“留学生活”のイメージが、異文化適応の努力や異邦人としての自分と結びついていたものから、アパート生活とカウンセリング過程をとおして、文化を超えた人間関係や自分の成長と結びついた形で肯定的なイメージに変容していることが示された。これは、PAC 分析の結果がカウンセリング効果を評価する上で有用なアセスメントの道具となっており、本機

Figure 3. N の第 2 回目の“留学生活”イメージ。

能が確認されたことを示している。なお、井上・伊藤 (1997) でも、カウンセリング初期における問題の所在の探索のための PAC 分析の結果を、カウンセリング終結期の結果と比較することによりクライアントの変化を説明・評価している。

以上のように 11 機能にわたって PAC 分析の効果はおおむね確認されたといえる。PAC 分析のこれらの特長は、カウンセリングにおける査定技法としての実用可能性を示している。

投影法など他の査定法との対比における PAC 分析

村瀬 (1965) は、ロールシャッハ検査を例に、カウンセリングにおけるアセスメントの役割について、いわゆる鑑別・診断的に利用するのではなく、発達援助的立場からクライアントの共感的理解への手段としての使用を提唱し、投影法の意義を論じている。PAC 分析も、このような利用法が可能であることが、本研究全体から示されている。事例 Q と事例 N で明らかのように PAC 分析は、他の投影法と同じように、言語的な自己開示が困難な場合、あるいは、不可能な場合のクライアントの内面世界を映し出す機能があるといえる。

なぜならば、PAC 分析は書記的方法 (福島, 1995a, 1995b; 福島・阿部, 1995) の一種であるにもかかわらず、構造化する作業はクラスター分析 (または井上・伊藤 (1997) が用いたように MDS) の統計的アルゴリズムによっているため解釈の客観性がある程度保障されているからである。また、村瀬 (1965) が指摘した、検査の実施による治療的役割については、PAC 分析は実施すること自体が評価のためのデータを得るのみならず、クライアントの自己開示や内面的気づきを明らかにし、治療過程を促進させたことは先に考察したとおりである。

PAC 分析のもう一つの特長として被験者と実験者との“対話”を結果の解釈の過程に用いることがあげられる。この言語的相互作用それ自体がカウンセリング過程の一環として位置づけられ、そのなかで二者が共同して意味的世界のとらえなおしと再構築をおこない、その成果を共有するという共同活動的意味をもつ。

以上をまとめると PAC 分析は、治療や発達援助の手がかりとして、①クライアントの主観的世界から出発し、②統計的アルゴリズムによる客観性を保持しつつ、③表出された意味の共同作業による再構成と対話の過程での解釈による意味の共有という、他に類例のない特長を有する技法であるといえる。

まとめと今後の課題

本研究では、内藤 (1993, 1997) の PAC 分析の概要を説明し、そのカウンセリング事例における応用可

能性について 11 の機能を仮設し、その存在を確認した。二つのカウンセリング事例による諸機能の検討をおこない、PAC 分析のカウンセリング過程での有用性を各機能において明らかにした。また、投影法と対比することにより、PAC 分析のカウンセリング過程導入への有効性を明らかにした。

研究方法論からみると、PAC 分析がカウンセリングの事例研究法と結びつくことにより、下山 (1996, 1997) のいう“循環的仮説生成-検証過程”をととした“実践型研究”の可能性が開かれると期待される。下山 (1996, 1997) の表現に則って述べると、PAC 分析と事例研究の組合せにより、データ収集の場の型としては、刺激語の統制などによる“実験”、多変量解析による条件抽出という“調査”、現実への関与という“実践”の三つが組み合わされる。また、データ収集の方法は、行動の“観察”と PAC 分析などの“検査”とカウンセリング過程での“面接”が統合される。データの処理については、“質的記述と量的分析を組み合わせることで構造分析の事例研究”をおこなうのが PAC 分析の特徴である。研究の目的からは、仮説 (モデル) の生成と検証が循環的に発展し、個性記述の方法と法則定立的な研究の統合された研究として、カウンセリング過程での PAC 分析による方法が有力であるといえる。

これまで PAC 分析のカウンセリング過程への導入についての長所を論じてきたが問題点と課題もある。

第一に、被験者にとっての手続きの複雑さという観点からみて、PAC 分析の応用範囲とその限界を明らかにすることが課題である。第二に概念間 (項目間) の類似性、あるいは距離の判断の一貫性の問題が検討されねばならない。第三に、PAC 分析にはクライアントによって向き不向きがあるように感じられる。PAC 分析の応用可能性におけるクライアントの個人差や文化差の要因について検討が必要である。第四に、内藤 (1993) も指摘するように、PAC 分析は、効率的であり、実施が比較的容易であるという特長をもつが、カウンセリングの場面における不用意な実施や乱用による問題が今後生じることが懸念される。特に刺激語がカウンセラーの側で自由に設定可能であるので、その選定には十分注意を払わなくてはならない。

PAC 分析は可能性を秘めた技法である。さらなる発展のためには、カウンセリング過程における導入時期の検討、カウンセリング面接場面での PAC 分析で得られた情報の活用方法、刺激語の選択基準などが今後の検討課題である。

引用文献

ブロンフェンブレンナー U. B. 磯貝芳郎・福永 護

- (訳) 1996 人間発達の生態学——発達心理学への挑戦—— 川島書店
- (Bronfenbrenner, U. B. 1979 *The ecology of human development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.)
- 遠藤公久 1995 自己開示における抵抗感の構造 カウンセリング研究, **28**, 47-57.
- 福島脩美 1995a “Course of Life” 作図の効果に関する研究 学生相談研究, **16**, 1-10.
- 福島脩美 1995b カウンセリング過程における“人生コース図”作成の効果 学生相談研究, **16**, 70-77.
- 福島脩美・阿部吉身 1995 カウンセリングと心理療法における書記的方法 カウンセリング研究, **28**, 212-225.
- 井上孝代 1997 留学生の文化受容態度とカウンセリング——PAC分析による事例研究を通して—— カウンセリング研究, **30**, 216-226.
- 井上孝代・伊藤武彦 1997 異文化間カウンセリングにおけるPAC分析 井上孝代(編) 異文化間臨床心理学序説 多賀出版 Pp. 103-137.
- アイビー A. E. 1985 福原真知子・梶山喜代子・國分久子・楡木満生(訳) マイクロカウンセリング 川島書店 Pp. 47-57.
- (Ivey, A. E., & Gluckstern, N. B. 1974 *Basic attending skills*. North Amherst, MA: Microtraining Associates. Chapter 4.)
- 村瀬孝雄 1965 カウンセリングにおける診断の問題 誠信書房(編) カウンセリングの展望 誠信書房 Pp. 20-51.
- 内藤哲雄 1993 個人別態度構造の分析について 信州大学人文学部人文科学論集, **27**, 43-69.
- 内藤哲雄 1994 個人特有の態度構造を測る——態度の心理学—— 浅井邦二(編) こころの測定法——心理学における測定の方法と課題—— 実務教育出版 Pp. 172-193.
- 内藤哲雄 1997 PAC分析実施法入門——“個”を科学する新技法への招待—— ナカニシヤ出版
- 下山晴彦 1996 心理学における実践型研究の意義——臨床心理学研究法の可能性をめぐって—— 心理学評論, **39**, 315-337.
- 下山晴彦 1997 臨床心理学研究の理論と実際——スチューデント・アパシー研究を例として—— 東京大学出版会
- 山本和郎 1986 教職員との連携のなかで——コンサルテーション—— 鳴澤 実(編) 学生・生徒相談入門 川島書店 Pp. 111-126.
- 1997. 8. 7 受稿, 1998. 1. 10 受理——